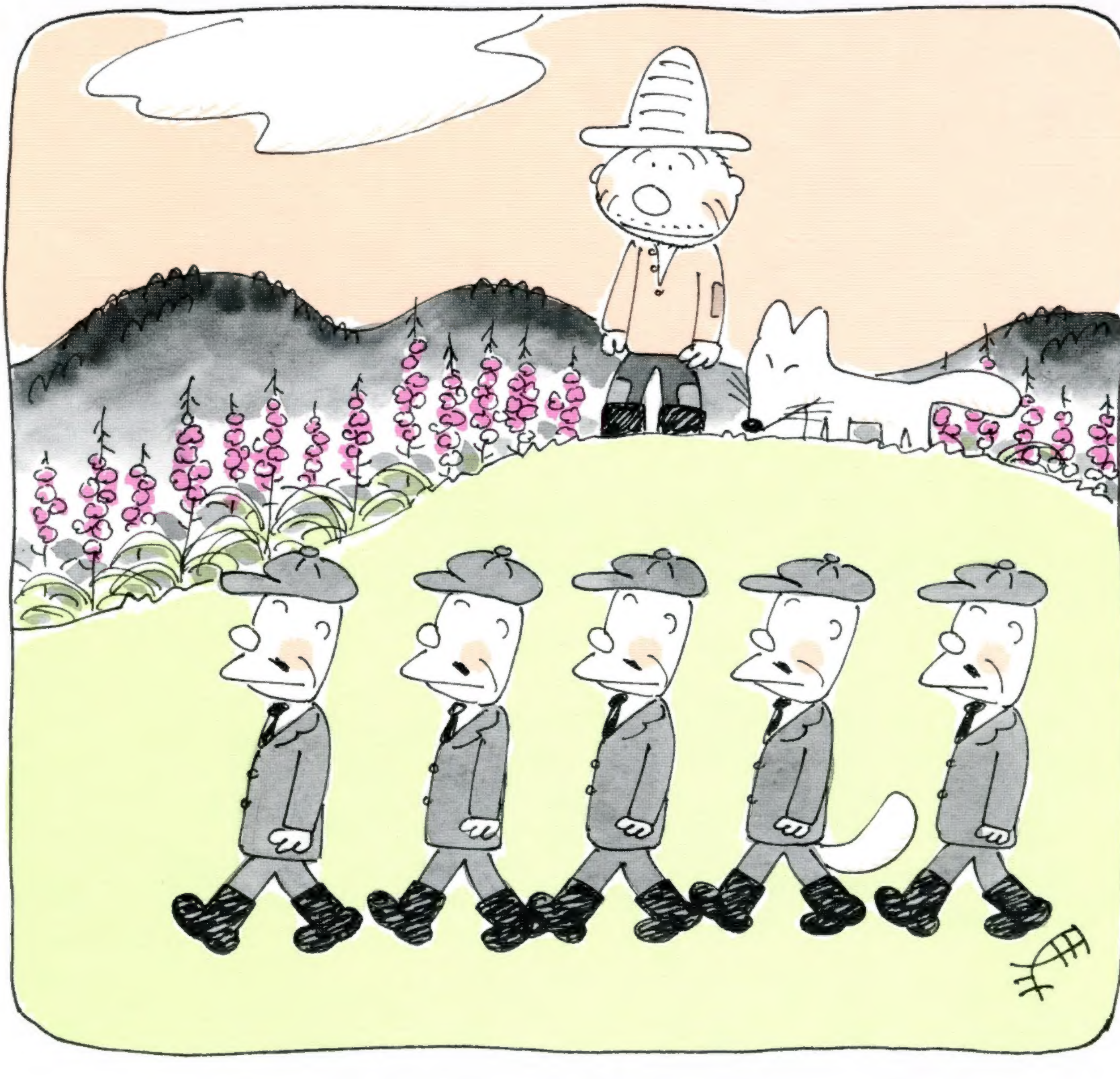
# 五助じいさんのキツネ

馬場のぼる



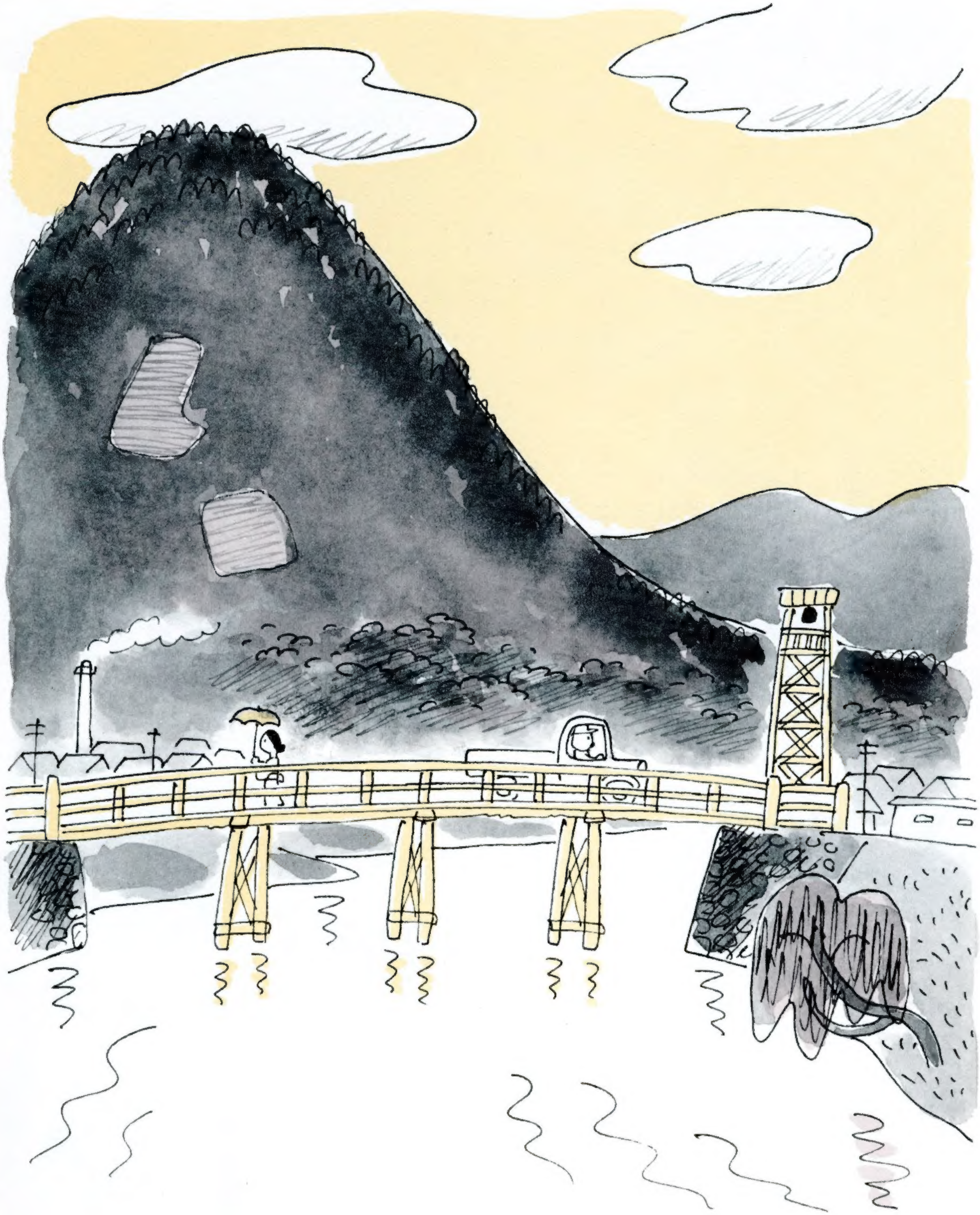
# 五助じいさんのキツネ

馬場のぼる



こぐま社

五助じいさんの小屋は、ひがね山の沢をちょっと
上ったところにありました。
五助じいさんは、そこに、ずうっとひとりで住んで
いましたが、ある年の夏、急に友だちができたのでした。



　五助じいさんのはなしによると、その朝おきて小屋の戸をあけてみたら、軒下においた樽の中に、そいつが、すまァして入ってたんだそうです。
「ほい……キツネかい。ほほォ、まだ小さいなおまえ、どっからきたね」



そういっても、キツネに人間のことばがわかるはずがありません。

キツネの子は、にげるようすもなく、きょとんと、じいさんの顔を見上げていたそうです。

「ほい、コンコン、なにか食うかね」

五助じいさんは、小屋の中からイワナのほしたのを三びきばかり持ってきて、キツネの子に食べさせました。



「コンコン、うまいかね……うふん」
とまあ、そんなあんばいで、その日からキツネの子は、じいさんといっしょにくらすことになったのでした。
　なにか、名前をつけてやらなければとも思いましたが、つけるとなるとなかなかうかんでこないものです。
「ま、コンコンでもいいか……」



五助じいさんは、山の畑へ出かけるのが日課でした。
出かけるときは、ヤカンのかわりに湯タンポに水を入れて、
水筒みたいにぶらさげていくのです。



　キツネの子は、じいさんのせなかで湯タンポが、
タポンタポン鳴るのを聞きながらついていきます。
　もうコンコンは、じいさんの出かけるところへは、
どこへでもついていきました。
　ふしぎなもので、そうやっていっしょにくらして
いるうちに、じいさんとキツネの子は、
おたがいにことばが通じるようになっていったのです。



「ほい、どうもきょうは暑いなあ。そこの木のかげでひるねでもするか」

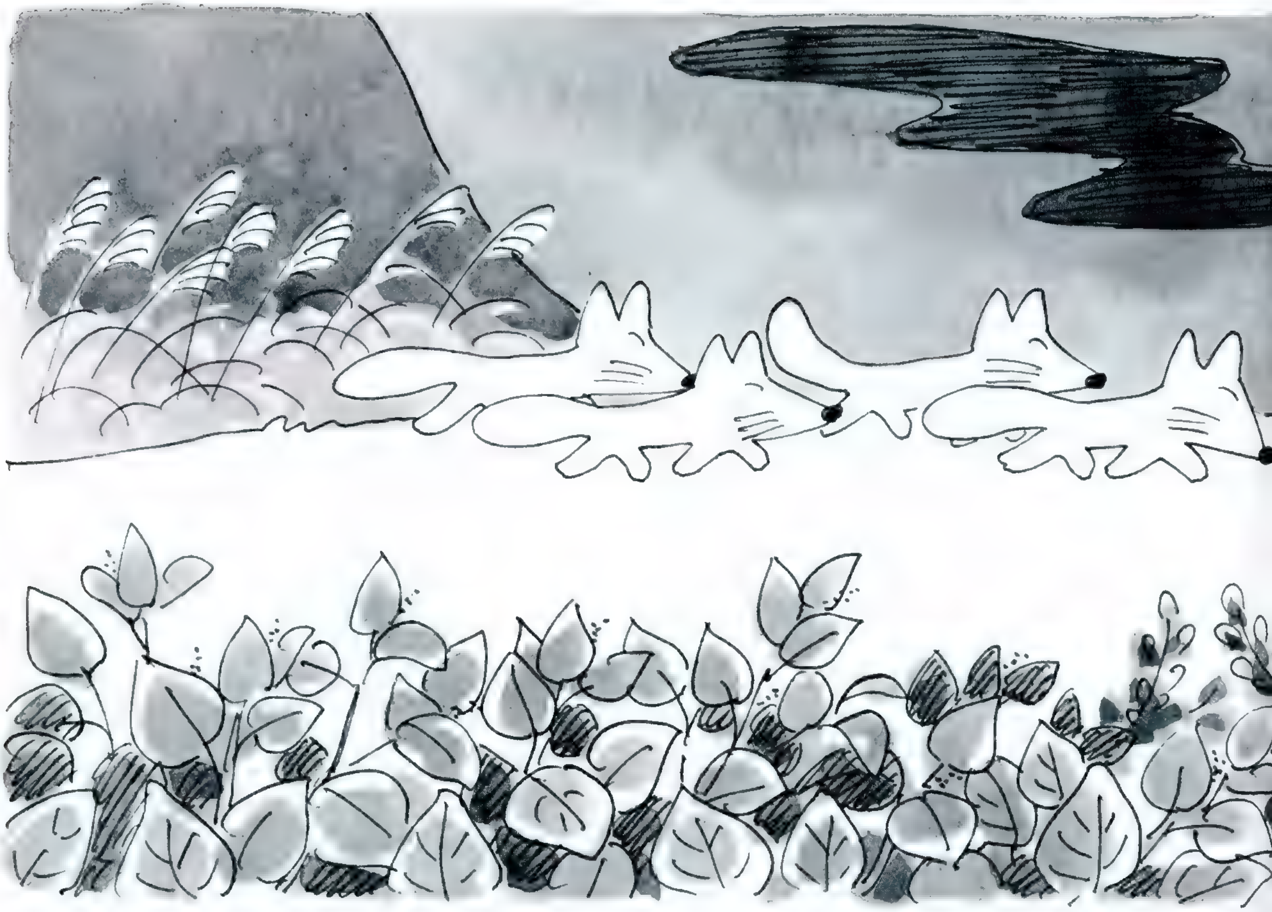
「うん、ひるねでもするか」

　じいさんは、湯タンポをまくらにして、麦わら帽子を顔にかぶせてねむります。コンコンも、まねをして木ぎれをまくらに、はっぱを顔にかぶせます。

　じいさんは、なんだかすこし心配になりました。

「どうも、まずいよこれは。だんだんキツネらしくなくなってくるよ……」





夏のおわりのある晩のこと。

五助じいさんは、小屋の前をキツネの群が行列していくのを見ました。

月の光をうけて、それぞれせなかを銀色にしながら、

すいすいすい……

草はらをよこぎっていきます。としよりらしいのが先頭で、みんなで五ひきいます。

「ほーい、どこへいくのかね」



　五助じいさんは、声をかけてみました。と、
キツネたちは、てん、と立ちどまってこっちをむいて、
「ちょっと、そこまで……」
　としよりギツネが返事をしました。
「ふうん。なにしにいくのかね」
　としよりギツネは、ちょっと鼻にシワをよせて
こまったような顔をしました。

「その……化け方をな、わかい連中におしえに
いくとこなのさ」
「ふうん、なるほどー。で、なんの化け方をやるのかね」
「うーん、そのな、大きな声じゃいえないけど……
人間にな」
　五助じいさんは、これはちょうどいい、と思いました。
「じつは、わしのとこにもわかいのがいるんだが、
いっしょにおしえてやってくれないかね」
　じいさんの足のかげから、コンコンが、さっきから
のぞいていました。
「ふんふん。どっから迷ってきたんだろ、
見たことのない顔だが」
「ひとつ、たのむよ大将……」
「ふんふん、まあよかろう。いっしょについてきな」



　月見草がいっぱいさいている原っぱで、
キツネたちの化けるけいこがはじまりました。
　としよりのキツネが、切り株の上にあがって、
まず模範をやります。
「いいかな、化けるにはまず呼吸をととのえて、
正しい姿勢をとることがだいじである。そうしてからキェッ……」
とさけんだかと思うと、切り株の上でクルクルッと
宙がえりして、パッ。



　りっぱな洋服を着たお役人さんのすがたになりました。
「えへん、わかるかな。これは、県庁におつとめの人
である。化けるときには、かならず、えらいさんに
化けなければいかん。その方がタメなのである。
いいな、では、いまの要領ではじめェー」
　キツネたちはいっせいにクルクルッ。
　はじめのうちは、なかなかうまくは化けられません。



　でも、それぞれ深呼吸をして息をととのえたり、
キェッ……などとやってくりかえしているうちに、
どうやらこうやら、えらいさんのすがたになっていきましたから
たいしたもんです。
　ところが、コンコンだけはどうしたわけでしょう。
えらいさんどころか、人間の形にもなんにもならなくて……
湯タンポになっちゃうの。
「あややや、なんだなそりゃァ」
「あはははは」
「げらげらげらげら」
　りっぱなすがたになったキツネたちは大笑い。



コンコンは、泣けてくるのをやっとがまんしながら
小屋にもどりました。

それから一週間たって、キツネたちはもうすっかり、
化け方を卒業しました。
でも、五助じいさんのキツネだけはとうとう、
湯タンポに化けることしかできませんでした。





キツネたちは、卒業記念に町へ出かけていくことになりました。みんな、えらいさんのすがたになって町へくりだしていって、ごちそうを食べるのです。



五人のお役人さんは一列になって、ぞろぞろ山をおりていきました。

その後から、五助じいさんは湯タンポをぶらさげてついていきました。

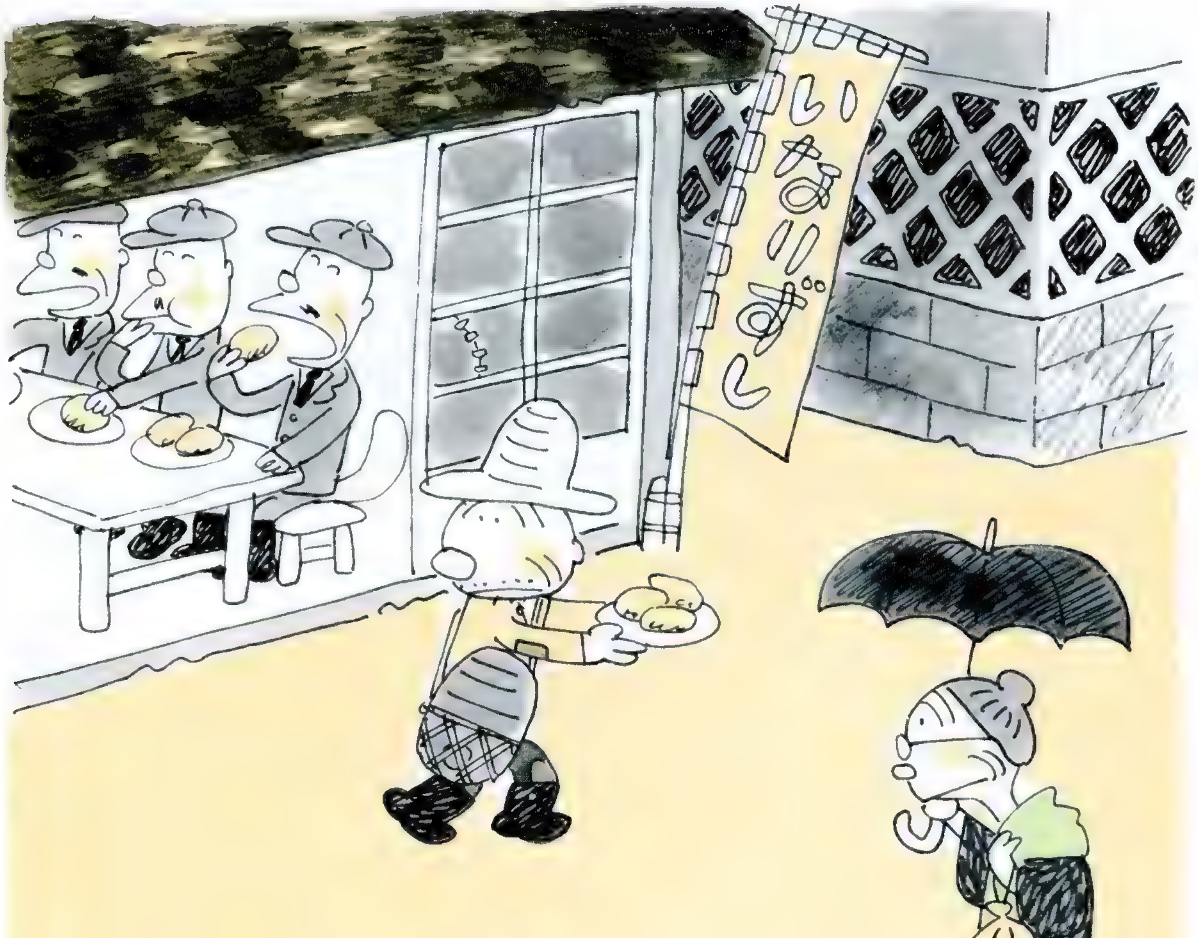
「うちの湯タンポにも、ごちそうを食べさせてやらないとな……」

　町につくと、お役人さんたちは、いなりずしの店に
入っていきました。
　店の人は、県庁のえらいおかたが五人も
やってきましたから、もうびっくりして、大いそぎで
いなりずしを皿に盛ってみんなにくばりました。
　五人のえらいさんたちは、すぐにむしゃむしゃ
食べはじめました。



「シッ、あんまりむちゅうになるとシッポが出るぞっ」
　としよりギツネが注意したりしています。
五助じいさんのいなりずしは、いちばん最後に
くばられました。
　じいさんは、皿をかかえてうろうろしながら
店の外へ出ました。
　湯タンポがおいなりさんを食べるのですから
見つかったらたいへんです。

「おやまあ、いい湯タンポだこと」
　通りかかったおばあさんが、立ちどまって目を
まるくしました。
「あれー、これはまあほどよくほかほかして、
なァんていい湯タンポでしょ。」


いなりずし

おばあさんは、さわってみていよいよ目をまるくして、
「私のリュウマチには、こういうのがいちばんいいんですよ。
ねえねえ、ぜひ私にゆずってくださいな」
五助じいさんおどろいたのなんの。
「いえ、あの、これはそのォ……」
「お金なら、いくらでもはらいます。
私はこの町の、おやしきのご隠居さまなのですから。
わあー、ほっかほか」
ご隠居さまはもう、湯タンポをかかえこんで、
はなそうとしません。
とまあ、そんなあんばいで、いやもおうもありません。
コンコンの湯タンポは、なんとすごい大金で、
ご隠居さまお買いあげになってしまいました。



「あのォ、その湯タンポは、なかなかかわっておりますからな、
どうかあのォだいじにとりあつかって……
ときどきイワナの干物などを、そのォ……」
「わかっておりますよ。日に三度、おかしらつきを
あげるようにしますから、ホッホッホッ」
　ご隠居さまは、どうやら万事のみこんでらっしゃるようでした。
　五助じいさんは、おやしきでちょいとごちそうに
なったりして、夕方、いい心持ちになって山へかえったのでした。



　さて、その後五ひきのキツネたちは、
えらいさんに化けるのは取りやめにして、なんでも、
湯タンポに化けるけいこにはげんでいたというはなしです。

おしまい





五助じいさんのキツネ

©1979年12月10日第1刷発行　1985年12月15日第7刷発行
著者　馬場のぼる／整版　山田サビン／発行者　佐藤英和
発行所　株式会社こぐま社　東京都文京区関口1－43－5　電話（202)9438　振替 東京8－68389
写植　安曇工房／印刷　磯崎印刷株式会社／製本　有限会社 皆川製本
（検印省略著者承認）



ISBN4-7721-0063-6



定価 900円

ISBN4-7721-0063-6 C8793 ¥900E